

## 所属がなくなつて見えてきた 仕事の楽しさ

——渡辺さんは、ベトナム・ホーチミンの橋梁工事で活躍される一方、『エッセイ集「つれづれ窓」』（東京図書出版会）や『未来を創造する建設業』懸賞作文での国土交通大臣賞受賞、さらに雑誌『橋梁と基礎』でのエッセイの連載等、精力的に文章を発表されています。両者をどう位置づけていますか。

**渡辺**——私は61歳で会社を辞め、今は個人契約で働いています。会社人のときも、夢中がむしやりに働いていました。だからこそ楽しいものでしたが、無所属となつて初めて気がついたシビルエンジニアの喜びもあります。

それを若い人たちに伝えることが私の仕事かなという気分で、エッセイストを自称しているわけです。今の学生や若手社会人たちに、土木技術者とは何をする職業か、何が面白いのかがちゃんと伝わっているのか。それを伝えるのは確かな言葉しかない、という思いです。

『つれづれ窓』は、退職記念出版として会社生活の後半20年で喋ったり書いてきたことを中心にまとめたものです。ベストセラーになったら困るなと思つていたら、書店で売れたのは225冊でした。大臣賞受賞作文『夢の途中』は、今の生活をそのまま書いただけ。いずれも、それでこの職業の大変さと楽しさが伝わればいいと……。雑誌

# 渡辺 泰充

WATANABE  
Yasumitsu

さん

わが国橋梁技術の第一人者であり、  
かつ土木技術者の生活や折にふれて感じたことを発信し続けている  
「自称」エッセイストにお話を伺いました。

連載はその延長です。編集委員会にお願いしてベトナム生活の喜怒哀楽を書いています。最近怒つてばかりかなと少し反省しています（笑）。

——所属をなくして見えてきた仕事の楽しさとは、具体的に何ですか。

**渡辺**——簡単に言うと、目先の問題を解決する喜びです。現場では、鉄筋継手や場所打ち杭のトラブル、工程の大幅な遅れなど、毎日面白いほど課題が生まれます。会社ですと、問題が起こると会議を開き、原因を考え、再発防止策を立てた後に手当てしますが、ここでは解決すること先です。課題の7割は会社時代に経験済みですので、それに理屈と勘を加えて、とにかく何か策を示します。それでうまくいくと、途方にくれていたコントラクターのエンジニアや作業員たち

の顔が明るくなるのがわかります。無我夢中で働いていた時代と同じ喜びかもしれません。

## 今は人生の「転」

——渡辺さんの文章はリズムがあつて好きなのですが、よく読むとどんな短い作品にも起承転結がありますね。

**渡辺**——いやー、うれしいですね。そう言つていただいたのは大内さんが初めてです。実は中学以来、起承転結が作文の極意であると思ひ込んでいます。この順番ですらすら出てくれば楽なのですが、「転」から発想したり、「起・承」ときて「転」がなかなか出てこないようなときは、時間をかけてもあまりいい文章にはなつてい

ないような気がします。エッセイの「結」で大切なことはオチです。このことは、私は向田邦子から学びました。

考えてみれば、私の人生は今ようやく「転」が始まったばかり。これからどう「結」に向かってゆくのか。まだ先は見えていません。

## 一流のエンジニアに育てるには責任と権限を与えること

——一流のエンジニアになれるかなれないかの差は、どこにあるのでしょうか。

**渡辺**——一に好奇心、二に腰の軽さ、三に学ぶ力でしょうか。私は、会社が初めて橋梁市場に参入したときのメンバーでしたが、そのときも会社を辞めて海外へ行くと決めるときも、大した不安はありませんでした。いわゆる「おつちよこちよい」「つまりあまり深く考えずに」「なんや知らないけど面白そうや」で動き出す。この姿勢は、エンジニアには大切だと思います。



今の現場でも、私の知らないことや理解していないことがいっぱい起ります。だから私は、学び続ける必要があります。そんなとき助けてくれるのは昔の仲間であり、本であり、見ず知らずの私にアドバイスをくれる日本のエンジニアたちです。それらを元に、未体験の課題に答えを出す力が重要です。

——後輩を一流のエンジニアに育てるために必要なことは何でしょうか。

**渡辺**——責任と権限を与えることです。一流のエンジニアには、隠れている問題を発見し、解決策を示す力が求められます。そういった能力は、教えられて身に付くものではありません。権限と責任を与えて自ら考えさせる以外にない。

私の場合、そういう意味では、会社に専門家がいない分野を担当したのでラッキーでした。自分で責任と権限を決めてきました。ところが、組織の長になるとそれがはつきりしなくなりました。その頃の私は、家内に言わせると、「今のあなたは輝いていない」(笑)。

責任と権限は、今よりちょっと広く与えるだけがいい。ダムもトンネルも橋もわかる必要はありませんが、橋なら橋で、設計から施工、お金まで全部わかるように育てる必要があります。それが一流のエンジニアです。今は、それらを分業にしたうえで、マネジメントなどという職種がこれをまとめる。大内さんの学校もそうですが、今の日本はマネジメント志向が強すぎると思っています。技術に立脚しないマネジメントに説得力はありません。

「僕はこれまで、橋しかやっていません」でいいじゃないですか。ただし、橋なら任せてください、と。そういう矜持をもたないと、一流にはなれません。

## 世界は君を待っている

——今後、海外で活躍する土木技術者が増えてくると思います。国内で一流の仕事をされ、海外に行かれて、決定的に違うと感じたこと、必要だと感じたことはありますか。

**渡辺**——決定的に違うのは、海外では会社名も渡辺泰充という個人名もまったく通用しないということ。みんな初対面ですから。信頼を勝ち得るには、一つひとつの課題にいろいろな判断や提案をして、ワタナベの言うことは間違いないという実績を積み重ねるしかありません。

海外では、責任と権限ははつきりしています。私は長年の癖で、ついつい権限を越えた行動をとって発注者から怒られたりしています。若手でもその範囲内で十分に仕事を楽しめます。世界は、志を持ち、好奇心と腰の軽さに自信のある若者を待っています。

ただし、日本の会社が本気で海外進出を考えるなら、家族をもつて海外で仕事をする人に対するサポートを強化しないと希望者がいなくなる。海外で活躍する多くのシビルエンジニアのように、わが国でも個人でプロジェクトごとに契約する土壌が生まれればいいのですが、それはその次のステップでしょう。